

# 医療経営の現場から

file077 関東・甲信越地区

## 糖尿病の専門治療を患者目線で提供 地域全体のレベルアップにも注力

### 患者1人ひとりと向き合う診療目指す

人口約80万人の山梨県には糖尿病専門医が常勤または非常勤で勤務する医療機関は18施設しかない。その1つが2006年に笛吹市で開業した中里内科クリニックDMである。「それまで4年半、総合病院に勤務していましたが、組織の制約を受けることなく自分の行いたい外来診療の実践が難しかった。それが開業したきっかけです」と中里稔院長は話す。

目指したのは、患者1人ひとりに十分に時間をかけ、向き合いながら診療を行うこと。同クリニックは内科全般を掲げているものの、中里院長が県内でも数少ない糖尿病専門医というこ

ともあり、糖尿病患者が7~8割を占める。「糖尿病をはじめとする生活習慣病の患者さんとは10年、20年のつきあいになってきますので、なんでも言い合えるような関係づくりがまず重要。加えて糖尿病治療では経済的な理由、あるいは仕事の都合などによる治療中断が大きな問題となっており、患者さん個々の生活まで目配りできる関わりが求められます」と中里院長は説明する。

たとえば、通り一遍の食事指導や生活指導では実効性がないため、患者に事細かくインタビューした上で問題を1つひとつ解決していくといった関わりだ。こうした医療を実現していくために同クリニックでは糖尿

病療養指導士3人を配置し、1人ひとりの生活状況に応じた具体的かつ実践できそうな提案を行い、生活習慣の改善を目指している。患者とのコミュニケーションにも工夫を凝らし、医療者からの一方的な助言や激励によって行動変容を起こさせるのではなく、患者に自信を与えて治療へのモチベーションを高めていくエンパワーメント型医療を提唱・実践。こうした診療姿勢を反映してか、同クリニックの治療中断率は全国調査の平均値と比較すると少し下回るといふ。

### 多様な検査機器揃え 他疾患に幅広く対応

糖尿病治療については、“100人いれば病態も100通り”をスローガンに、複雑な病態をできるだけ把握し、数ある糖尿病治療薬の中から個々の患者に適した薬物療法を行っている。正確な病態評価と適切な薬剤選択が専門医である中里院長の強みだ。

一方で、“ワンストップ”の検査・診療体制を目指し、血糖値測定器、HbA1c測定器などの糖尿病関連の検査機器はも

#### 中里内科クリニックDM 概要



- 所在地 山梨県笛吹市一宮町本都塚 148-1
- 院長 中里 稔
- 診療科 内科、糖尿病内科、代謝内分泌内科



看護師4人（うち3人が糖尿病療養指導士を、2人が保健師資格も有する）、メディカルクラーク1人、医療事務2人とともに、患者が笑顔で生活できるようサポート

もちろん、頸動脈・甲状腺・腹部超音波検査、スパイロメータ（肺年齢）検査、血算、CRP（炎症反応）迅速測定など多様な検査機器を揃え、さらに検査技師も非常勤で採用した。できる検査はなるべく院内で行い、対応できる疾患であれば治療も行うという、かかりつけ医的な面も合わせ持つ。

「患者さんに結構、『先生の専門外だと思うけど』と他の疾患について相談されます。なるべく1カ所の医療機関で治療を完結させたいというニーズがあると感じたので、こういう体制をとりました。たとえば、整形外科疾患でも内科で対応できるものは結構ある。対応できるものはするし、必要があれば整形外科の先生に紹介するようにしています」（中里院長）。

## コロナ対策を徹底し患者の減少を回避

このような診療体制と診療ポリシーにより、同クリニックに来院する患者数は、開業から漸増を続けている。2020年から続くコロナ禍でも患者数の減少はみられていない。もともと待ち時間を短縮するために予約制にしており、待合室は密の状態にならないほか、空気中だけでな

く付着菌も除菌する次亜塩素酸空間除菌脱臭機を導入するなど感染防止対策を徹底した成果だ。「そんなに患者数を増やしたいという意図はありません。やるべき診療を患者さんが安心してできる環境で提供してただけです」と中里院長は強調する。

開業からの付き合いである医療経営コンサルタントについては、「患者増によって駐車場のスペースが少なくなった際、手回しよく隣接する農地を転用する手続きを進めてくれました。われわれが診療に注力できるのは、制度や環境に目を光らせているコンサルタントのおかげ。引き続き経営面での情報提供などを願っています」。

課題は地域でいかに循環型の糖尿病連携を築いていくかだという。糖尿病患者数は潜在患者を含めて2,000万人といわれ、少ない糖尿病専門医だけで到底対応できる数ではない。「そのため専門医とかかりつけ医による循環型の連携が提唱されていますが、なかなか難しい。実際、お返しするつもりで診療を始めても患者さんが戻らなくなってしまうケースが多い」と中里院長は実情を話す。循環型の連携を実現していくために



院長 中里 稔氏

1992年山梨医科（現山梨）大学医学部卒業、第3内科医員。1997年同大学医学部大学院卒業（医学博士（甲）取得）、同年米国国立保健衛生研究所（NIH）留学（3年1カ月）。2000年山梨医科大学第3内科医員、2002年山梨厚生病院内科、2005年山梨厚生病院内科（糖尿病）医長、2006年中里内科クリニックDM開業。日本内科学会認定医、日本糖尿病学会認定糖尿病専門医ほか日本内分泌学会に所属。2007年山梨県糖尿病対策推進会議幹事。

は、専門医とかかりつけ医の役割分担の再整理、さらには診療報酬体系のあり方を見直すといった環境づくりも必要になりそうだ。

まずは地域における糖尿病診療のレベルアップを目的に、中里院長は各種の勉強会などの講師を積極的に務めている。「地域に貢献できるので、すごくやりがいを感じています。循環型連携を実現していく1歩にしていきたい」と今後の抱負を語る。



療養指導室：患者1人ひとりに十分に時間をかけ、向き合いながら診療を行う



感染対策として、入口には注意喚起の看板（①）、自動ドアの入口を入ると、高性能の空気清浄機（②）と自動手指消毒器（③）がある。院内用のスリッパは除菌済みだが、一部紫外線殺菌スリッパも設置。さらに待合室、診察室など院内のそこかしこに異なる種類の空気清浄器（④）、加湿器を設置。これら対策の詳細は写真15枚・動画も駆使してホームページで丁寧に説明されている